



やうことみゆきの

## なるほどアイヌ文化エッセイ ソンコ de ソンコ



アイヌ文化のことをもっともっと話したい!  
本田優子と村木美幸の二人が、  
その魅力を交代で執筆する  
ソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

キナポー マンボウ

Vol.89

今月のテーマ



本田優子  
(札幌大学教授)

マンボウは北海道名

地で「きなんぼう」って  
呼ばれるけど、アイヌ  
語ではキナボ。どうちがむとなのか…よく  
わかりません。日高から東ではペパルプと  
呼ばれることが多いみたい。

私が初めてマンボウを見たのは東京の  
サンシャイン水族館。「なんて巨大!なん  
て不思議!」すっかりファンになりました。  
お天気のいい夏の日 マンボウは海面に浮  
き上がつて日向ぼっこをしてるんだって(か  
わいい-)。その姿が太陽みたいだから英  
語ではオーシャン・サンフィッシュ。昔のアイ

大海  
太陽  
魚  
語ではオーシャン・サンフィッシュ。昔のアイ

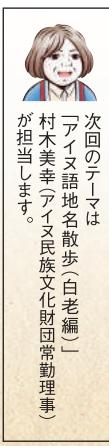


イラスト／莊田悠人

スの人たちはそこに鉛を打ち込んだんだけ  
ど、海に潜つてなかなか上がつてこない時  
は、「酒もイナウ(木幣)もいっぱいあげるか  
ら」って、なだめすかんですつて。で、獲つ  
たマンボウは、肉も食べるけど特に肝臓の油  
が大事だったみたい。私が白老でいただ  
いたマンボウの肝あえも、とても美味でし  
た。ちなみに肉は「サバよりも足が早い(＝  
腐りやすい)」と言われ、なかなか市場には  
出回らない「海辺のごちそう」です。

江戸時代の人たちもこんなマンボウに  
興味津々だったみたいで、『北海隨筆』(一七  
三九)には、現代語訳するとこう書かれて  
います。『アイヌの人たちは特に、あぶらわ  
り。釣り上げられたマンボウが「蝦夷島奇  
觀」と同じ、怖くい顔をしてたのです。

アイヌの物語に出てくるマンボウも、主人  
公の妹をさらつていった化け物が切り刻ま  
れた末に、海に流されて化身したものだと  
言われたり、ちょっと不気味な存在。今も、  
海に浮かんで日向ぼっこしてるマンボウは  
実は病氣で重体なのだ説とか、ごつちやりつ  
いてる寄生虫を鳥に食べてもらつているの  
だ説とか…やっぱりなんだか怪しい。でも、  
だからこそ、妙に心惹かれるのよね。



次回のテーマは  
「アイヌ語地名散歩(白老編)」  
村木美幸(むらきみゆき)：白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。

が担当します。



イランカラープラ  
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ)：金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。  
■村木美幸(むらきみゆき)：白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。  
■莊田悠人(しょうだゆうと)：平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。